**第3章　人口**

**概況**

　昭和61年10月１日現在の本府の人口は、871万837人で、60年10月１日の国勢調査からの１年間に４万2742人増加し、増加率は0.49％であった。
　56年以降59年まで、わずかながら前年を上回る伸びを示してきた人口増加数は、60年にいったん下回ったものの61年は、前年を5258人上回る４万2742人の増加となった。
　人口増加を出生と死亡の差である自然増加と、転入と転出の差である社会増減の動きでみると、自然増加数は、48年以降一貫して減少を続け、58年にわずかに549人前年を上回っただけで、依然低下傾向が続いており、61年は、前年より5370人減って５万297人の増加となった。
　一方、社会増減は54年までの減少から、その後は、回復傾向に転じ、60年にはいったん減少数が増加したものの、61年は、前年より減少数が１万628人減って7555人となり、本府の社会減少数は、初めて１万人を割り、大幅な回復をみせた。
　世帯数は、294万6505世帯で、この１年間に４万1788世帯、1.44％増加した。
　１世帯当たり人員は、58年から年々0.02人ずつ減って、61年は2.96人となった。

**転入と転出**

　住民基本台帳移動報告による本府の転入と転出をみると、昭和60年１月１日から同年12月31日までの１年間の転入者は前年より9222人下回る20万6629人となった。一方、転出者は前年より2539人下回る22万6894人となった。この結果、転出超過数は前年より6683人増え２万265人となった。

**年齢構造**

　昭和60年国勢調査結果による本府の人口の年齢（３区分）構成をみると、年少人口（0～14歳）は185万179人、老年人口（65歳以上）は71万6579人、生産年齢人口（15～64歳）は609万3737で、総人口に占める割合は、それぞれ21.3％、8.3％、70.3％となっている。年少人口は、第２次ベビーブーム（昭和46～49年）による出生増で50年には212万992人となり総人口の25.6％といったん増加したが、その後、出生率の低下により減少に転じ、50～55年には５万3409人減少、55～60年に｡は21万7404人と大幅に減少し総人口に占める割合も55年は50年より1.2ポイント低下、60年には55年より更に3.0ポイント低下して21.3％となった。一方、老年人口は40年から５年ごとに10万人前後増えており総人口に占める割合は着実に拡大が進行し、60年は8.3％となっている。また、生産年齢人口は、第１次ベビーブーム（昭和22～24年）に出生した人口が15歳以上に達した40年に総人口の72.5％を占めたのをピークに、その後、人口は増加しているものの割合は減少傾向にあった。しかし、55～60年には30万人を超える増加となり、60年の総人口に占める割合は、55年より2.0ポイント上昇の70.3％となった。
　次に、５歳階級別人口をみると、0～４歳人口は、50年に第２次ベビーブームによる出生増で81万6605人（総人口の9.9％）に達したが、その後、出生率の低下に伴い減少を続け60年には51万7246人（同6.0％）となった。

**労働力人口**

　昭和60年国勢調査1%抽出集計結果による労働力状態をみると、15歳以上人口679万7000人のうち、労働力人口（就業者・完全失業者）は419万6100人で、労働力率（15歳以上人口に占める割合）は61.7％である。一方、経済活動に従事していない家事従事者、通学者、老齢者などの非労働力人口は257万8400人となっている。

**人口動態**

　本府の出生率の推移をみると、第２次世界大戦直後の昭和22年から24年頃までは、人口千人に対して30以上の高率を示していたが、その後は低下を続け、32年に15.2とそれまでの最低を記録した。翌33年から上昇に向い、42年には23.2となり、以後横ばいの状態が続いていたが、47年から再び低下傾向を示している。
　昭和60年の本府における出生数は、10万328人、出生率（人口千対）は、11.6 （全国11.9）となっている。これを市町村別にみると、島本町（15.2）、茨木市（13.8）、高石市（13.2）などが高く、低い市町村としては、豊能町（8.7）、千早赤阪村（8.8）、河南町（9.0）などがある。
　一方、本府の死亡率の推移をみると、昭和22年に人口千人に対し14.5であったのが、戦後のめざましい医学の進歩、生活環境の改善により46年には5.1にまで低下し、以後は横ばいの状態を続けている。
　昭和60年の本府における死亡数は、４万8152人、死亡率（人口千対）は5.6 （全国6.3）となっている。これを市町村別にみると、能勢町（8.7）、岬町（8.6）、河南町（7.6）などが高く、低い市町村には、狭山町（3.7）、島本町・枚方市（3.9）、吹田市・寝屋川市（4.1）などがある。
　なお、昭和60年の本府における死産数は、5430胎（出産千対51.3）、婚姻件数は５万5763件（人口千対の婚姻率6.4）、離婚件数は１万4355件（人口千対の離婚率1.66）となっている。
　次に、昭和60年の日本人の平均寿命（0歳の平均余命）は、厚生省の簡易生命表によると、男の平均寿命は74.84年で前年に比べ0.30年の延びを示し、女の平均寿命は80.46年で前年に比べ0.28年の延びを示した。
　これを国際的にみると、国により生命表の作成基礎期間等が異なるため、厳密な比較はできないものの、男72年、女78年を超えている国をみると、日本のほかオランダ、スイス、アイスランド、ノルウェー、スウェーデン、オーストラリアがある。この中で男73年、女80年を超えているのは日本とアイスランドであり、日本の平均寿命は男女とも世界のトップグループに入っている。
　なお、昭和55年地域別生命表（厚生省作成）から大阪府の平均寿命をみると、男72.96年、女78.36年で、全国都道府県中（平均男73.57年、女79.00年）男33位、女45位となっている。